

科目区分：発達障害コース

受講生数：27名

授業公開報告書「代替コミュニケーション論」

特別支援教育講座・荻田知則

1. 講義の目標

コミュニケーション上の困難さを持つ子ども・人達が、代替コミュニケーション(AAC)や支援機器(AT)を用いて他者とコミュニケーションをとる方法を学ぶことを目的とした。具体的な到達目標は、(1)障がい疑似体験を通して、障がい児・者の困難を共感的に理解する、(2)AACやATの基本的知識について説明できる、(3)障がいの特性・ニーズに合わせたAAC、ATの使用方法を説明できる、の3点とした。

2. 講義の進め方・シラバス

講義は全体を三分割し、最初の三分の一は、コミュニケーションをとる上で必要になる心理学的・医学的基礎知識について概説を行った。次の三分の一は、前半で行った講義内容をもとに、疑似体験を通じた障がい児者が抱えるコミュニケーションや生活上の困難を共感的に理解するグループワークを行った。最後は、肢体不自由児者がAACを用いてファーストフード店に買い物に行く方法等をグループで検討し、発表を行った。

シラバスの「授業の内容」を以下に示す。

<授業の内容・スケジュール>

第1回：ガイダンス

第2～6回：肢体不自由児のコミュニケーション、AACに関する基礎知識

第7～9回：肢体不自由児の疑似体験と、AAC・ATの指導法

第10回：知的障がい、病弱児の疑似体験と、AAC・ATの指導法

第11回：発達障がい児の疑似体験と、AAC・ATの指導法

第12回：視覚障がい、重複障がい児の疑似体験と、AAC・ATの指導法

第13・14回：肢体不自由児等へのAACフィッティングに関するグループワーク

第15回：総括

3. 障がい疑似体験

コミュニケーション支援やAACの利用方法を理解するために、6つの障がいの疑似体験を行った。疑似体験を行う上では、障がい当事者が困難さを抱く日常生活場面を抽出し、シミュレートする必要がある。本講義では、以下に示す日常生活

場面を設定した。同時に、ただ疑似体験を行っただけでは、必要以上に困難さが強調される傾向がある(例：見えないという状況は、本当に怖くて不安だった。自分だったら耐えられない)。したがって、疑似体験終了後、「よくある疑似体験での誤解」として、疑似体験を行ったときに生じる困難さに対する誤解を紹介し、解説を加えて過度に困難さが強調されないよう配慮した。また、疑似体験を行った感想や気づきについてレポートの提出を求めた。

- 全盲**：全盲の人と旅行を計画する場面を設定し、グループ(6名前後)で一人がアイマスクを着用し全盲役、一人が支援者役を演じた。支援者役の受講生がパンフレットの内容(写真含む)を全盲役の受講生に説明する課題を行った。
- ロービジョン**：ロービジョンの学生が支援者と生協に買い物に行く場面を設定し、一人がロービジョンシミュレータを着用しロービジョン役、一人が支援者役を演じた。
- 盲ろう**：通訳介助者と生協に買い物に行く場面を設定した。グループのうち、一人が盲ろう者役、一人が通訳介助者役を演じた。盲ろうの状況は、アイマスクかロービジョンシミュレータのいずれかを着用し、耳栓(約33dB減衰)とホワイトノイズが流れるヘッドホンを着用して作り出した。
- 重度重複障がい**：養護学校における朝の会での指導場面を設定した。グループのうち一人が重度重複障がい児役(知的障がい+視覚障がい)、一人が教師役を行った。重度重複障がい児役は、ロービジョンシミュレータを着用した。教師役は、無意味語(擬音語含む)とノンバーバルな情報のみで重度重複障がい児役に、朝の体操を行うよう指示する課題を行った。
- 書字障がい**：小学校での文字の導入場面(形のたどり書き)を設定した。グループのうち一人が書字障がい児役、他の参加者が教師・クラスメート役を演じた。書字障がい状況は、学習心理学の実験課題である鏡像描写課題を応用し、鏡に映る手の動きと紙上の模様のみをたよりに、形のたどり書きを行う課題を行うことで作り出した。

f) **肢体不自由**：肢体不自由の人と初対面で自己紹介をする場面を設定し、グループのうち一人が肢体不自由者役、他のメンバーが支援者役を演じた。肢体不自由者役には事前に随意運動が可能な部位を一箇所だけ指示した。一方、支援者役の受講生には、随意運動が可能な部位を見つけつつ、文字盤等を用いてコミュニケーションを取るよう指示した。授業公開では、この肢体不自由疑似体験を取り上げた。

4. 授業公開の実施

- a) 授業の目的：肢体不自由者疑似体験を通して、肢体不自由児者が有するコミュニケーション上の困難（煩わしさ）を共感的に理解することを目的とした。
- b) 授業の流れ：前回の授業内容を確認するため、授業開始時に小テストを行った。その後、肢体不自由疑似体験を行う旨を伝え、6人前後で小グループを作るよう指示をした。小グループができた後、肢体不自由者役の受講者に（他のメンバーには分からないように）随意運動が可能な身体部位（眼球、右手薬指、肛門括約筋等）を指示し、その身体部位のみを動かすことによって、Yes/Noを表現するよう求めた。他のメンバー（支援者役）には、(1)肢体不自由者役が随意的に動かしている身体部位を見つけること、(2)その身体部位を動かした場合はYes、動かない場合はNoとすること、(3)A4用紙に印刷した様々な五十音表を用いて、肢体不自由者役の受講者とコミュニケーション（自己紹介）を取ること、を伝えた。疑似体験が終わった後、各グループの肢体不自由者役の受講生に感想を求め、全体で肢体不自由児者がコミュニケーションを取る上で抱える困難を共有した。ただし、感じた困難のうち、協調されすぎている部分については、支援技術を用いることで困難を軽減する方法があることを伝え、フィッティング上の留意点について説明を加えた。

5. カンファレンス（2008年6月20日実施）

授業公開後行われたカンファレンスにおいて、指定討論者（長尾秀夫先生）からいただいたコメントを以下に述べる。

<よかったこと>

- a) 進め方：「もう書き終わりましたか？」など、確認しながら進めていたので、学生達のペースで授業が進んでいる印象があった。グループの体験発表は、体験を深め広げるのによいと思った。発話速度がゆっくりだったので、聞き取りやすかった。不完全な文字盤で発見学習することはよかった。あとで見本を示しておくともよいと思う（この点について、次回授業で見本と事

例のVTRを提示した）。

- b) 小テスト：毎週5問覚えれば、かなりの専門用語を身につけることになる。やはり必要なキーワードは、きちんと身につけることは重要なので、取り入れているのはよかったと思う。また、低い点を連続してとった場合に、個別対応を考えているのであれば、非常によいと思った。

<改善点>

- a) 授業教室の問題：せっかく疑似体験をしているが、固定式の机だったので全身をみるのに苦労したグループもあったと思う。全身が見える教室環境を選択して実習をするというのも考えてみるとよいのではないか。
- b) グループの構成メンバー：今回の疑似体験のように、身体部位を取り扱う実習では、異性が入っているとやりづらい（セクハラのように感じてしまう）学生もいるかもしれない。グループ作りで、なるべく同性が組み合わせになるようにした方がよいのではないか。現場でも、異性に介助してもらおうと遠慮してしまう当事者もいるので（次年度に向けて検討中）。
- c) 着席位置：どうしても中央前半部分が空席になりがち。実習のことなどを考えると、なるべく横や後方の席に座らないように、着席範囲を指定するのも一つの方法ではないか（検討中）。
- d) プロジェクターと黒板：今回は実習が中心だったので、プロジェクターは一部しか使わなかった。プロジェクターは短時間のみ提示しておくだけでもよかったのではないか（カンファレンス後の授業で取り入れた）。
- e) まとめの時間：授業の最後に、次週の予告を含めて新しい専門用語を紹介していたが、詳しい説明は次週行うということであれば、あえて今回紹介しなくてもよかったのではないか。例えば、情報をまとめる時間にした方が、学生達の記憶の定着にとってよいかもしい。もしくは、教科書を見てくることを意図していたのであれば、具体的なページを紹介して読んでくれるよう指示をしてもよい（カンファレンス後、ページ等を指示するよう更に注意した）。

6. 今後の課題

赴任後4年間、本授業の授業方法に改善を加えてきた。小テストとともに提出される授業の感想でも、全ての回で9割以上の学生から肯定的な感想が得られている。ただ、本授業はグループワークを中心とした授業であるにもかかわらず、毎年教室環境については学生からも改善のニーズが挙げられる（机等が固定されており、グループで討論をしにくい等）。今後、教室環境について更に検討・改善を加える必要があると考える。